

海老名弾正研究の諸問題

著者	關岡 一成
雑誌名	神戸外大論叢
巻	43
号	6
ページ	1-17
発行年	1992-11-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00002071/

海老名弾正研究の諸問題

關 岡 一 成

はじめに

1917年夏、御殿場で避暑中に旧知の海老名（1856-1937）に出会った内村鑑三（1861-1930）は共にレコードで音楽を楽しみ、親しく懇談した。その会話の中で内村は海老名に「内村と海老名とは切つても切られない縁があるものと見える、内村の名の出て来る處にはきつと海老名の名がある、海老名の名の出て来る處にはきつと内村の名がある、いつでもどつちか一方が書かれると必ず他の方も出て来る、まことに切つても切れない縁がある⁽¹⁾」と語った。

海老名弾正は、近代日本思想史上内村に劣らず重要な人物である。その思想は内村のそれとは異なるが、独創性に富んでいる。生前から海老名は、札幌バンドを代表する内村鑑三、横浜バンドを代表する植村正久（1858-1925）と共に、熊本バンドを代表するキリスト教思想家として著名であった。今日も、近代日本のキリスト教思想に言及される際には必ず海老名の名前が出される。

海老名の名は、近代日本思想史の研究者にはよく知られている名であるが、ほとんどその実像や全体像は知られていない。海老名研究は断片的にはあるものの、彼の全体像を扱ったものは、没後55年を経た今日も現れていないと言える。むしろ、未だに海老名の著作集や全集がでていないこともあり、海

(1) 海老名弾正「内村君と私との精神的関係」鈴木俊郎編『追想集 内村鑑三先生』岩波書店、1934年、15ページ。

老名の思想が全体から切り離されて、一部分があたかも彼の中心思想であるかのように書かれ、それがさらに引用されて定着し、誤解されている人物である。

海老名研究は、その思想上・内容上の誤謬もさることながら、事実的な事柄に対する誤りも多く、その面での訂正も必要である。事実的誤謬の比較的新しい例を一例だけ挙げると、内田芳明著『現代に生きる内村鑑三』（1991年）である。本書は、内村を扱うもので海老名を論じているわけではないが、その一節に海老名の名を挙げて、次のように記している。

1876（明治9）年に花岡山の誓約に結集して「熊本バンド」の担い手となった人々についてみても、海老名弾正、金森通倫、横井時雄、小崎弘道などいずれも熊本藩の下級武士であった。彼らは九州の雄藩でありながら、藩論の分裂のため、薩摩藩と共に倒幕の運動に参加して新政権の推進主体となるチャンスを失ったのであり、そのため藩の不平不満の武士たちであった。⁽²⁾

「熊本バンド」を代表する人物の最初に海老名を置き、彼が熊本藩の下級武士であったとしているのであるが、これは誤りで海老名は熊本藩ではなく、隣の小藩柳河（柳川）藩の武士であった。海老名は16才から20才の4年間「熊本洋学校」に学び、熊本の地で決定的な影響を受けているが、彼は生涯柳河藩の出身であることを忘れたことはなかったし、誇りにしていた。また、柳河11万9千石から熊本54万石へ遊学した時の体験が、彼の生涯や思想形成に大きな役割を演じていることを知る者としては、この誤謬は非常に残念ではない。特に、内田氏が著名な学者であり、本書が事実的な誤謬を掲載することの少ない出版社として定評のある岩波書店の刊行であることを思うと、さらに引用されて誤りが広がることを懸念せざるをえない。

これはほんの一例である。少し本格的に海老名を論じた著書や論文にも、このような初歩的な誤謬ではないにしろ、かなり事実面での誤謬も多いのが

（2） 内田芳明『現代に生きる内村鑑三』岩波書店、1991年、12ページ。

(3)
実情である。海老名研究は、何よりも思想上、内容上の誤解・誤謬からの解放と同時にこの種の事実面での誤謬からの解放も必要である。

1 日本のキリスト教

日本キリスト教史では、「日本的キリスト教」は、「日本精神に同化したキリスト教。特に、昭和初期より太平洋戦争終結までの間、国家至上主義下の偏向したキリスト教を指す」と定義づけられ、「海老名弾正は日本精神とキリスト教との一致をはかり、神道や儒教とキリスト教との間に共通の土台を見⁽⁴⁾いさんとした」とされる。そして1930年代から顕著になった、国粹主義、軍国主義に妥協する形で次々に現れるようになった「日本的キリスト教」の思想的源泉があたかも海老名であるかのよう言われる。

後述するように、海老名の「日本的キリスト教」は、「日本精神に同化したキリスト教」でも、昭和初期より終戦までの偏向したキリスト教と直線的に結びつくものでもない。

それにもかかわらず、海老名の「日本的キリスト教」が、日本の伝統思想との習合、あるいは国粹主義、軍国主義との妥協から提唱された「日本的キリスト教」と直接に結合するものと見られてしまう原因は、神道や儒教や武士道を肯定的に評価していることに加えて、それ以上に日露戦争時に「戦争⁽⁵⁾の美」と題する説教をしたり、朝鮮併合に積極的に賛成する論陣を張ったり⁽⁶⁾したことが、一面的にあるいは内容もよく検討されないままに、国家至上主義に立脚する「日本的キリスト教」提唱者と見なされる原因となっている。

(3) 筆者も、拙著『近代日本のキリスト教受容』の「関連年表」欄で、海老名の出生を誤って記している。即ち「安政3年8月20日（太陽暦9月18日）」とすべき所を、「8月20日（旧暦9月18日）」と逆に記している。これは、海老名の死後、長男海老名一雄を発行人として非売品として出版された『基督教概論未定稿 我が信教の由来と経過』所収の「海老名弾正略歴」を参考にしたものであったが、そこに記されている「安政3年（1856）9月18日（太陽暦8月20日）」（82ページ）が旧新が逆になって間違っているのを見落としたことによるものである。

(4) 『キリスト教大事典』教文館、1963年、792ページ。

(5) 海老名弾正「戦争の美」『新人』5巻8号、1904年8月1日

(6) 「戦後の最善経営（満韓人の日本化）」『新人』5巻8号、1904年8月1日、「帝國の使命と韓國の復活」8巻9号、1907年9月1日など。

さらに、国家至上主義との妥協の産物としての「日本的キリスト教」と海老名が結合されることになったもうひとつの原因は、現在も海老名研究に欠かせない海老名の伝記『海老名弾正先生』の著者渡瀬常吉（1867-1944）との結びつきである。渡瀬が海老名の高弟とされ、海老名の伝記も著し海老名の思想の普及もしたが、渡瀬自身の思想、特に彼の「日本的キリスト教」の考えと師の海老名のそれとは同じ「日本的キリスト教」とはいうものの明らかにその内容は同じものではなかったのに、渡瀬の視点から海老名の「日本的キリスト教」が解釈されることに原因がある。

渡瀬は、国粹主義、国家主義に合うキリスト教が強く求められていた時期に、⁽⁷⁾『日本神學の提唱』と題する著書を刊行し、その中でキリスト教と日本の伝統思想との一致を説いた。恐らく彼には海老名の「日本的キリスト教」を曲解しているとの意識はなかったであろうが、海老名の死後直ちに執筆された伝記『海老名弾正先生』の「我國に於ける一神教的觀念の發展」⁽⁸⁾などにおいては、あたかも海老名がキリスト教と日本の伝統思想が連続するものと考えていたかのように描き、渡瀬と師の海老名の思想が一体であるかの印象を与えた。武田清子氏が「海老名弾正評伝」でこの渡瀬流の海老名解釈について「渡瀬のように、恩師の思想のある部分を、その思想の構造全体の中に位置づけて取り扱うよりは、その部分だけを切りはなし、自分の主観でそれを強調し論ずる時、それは恩師を、意図せずしてますます窮地においこむ結果ともなるのである」⁽⁹⁾と指摘しているが、筆者も全く同感である。

確かに、海老名と渡瀬の人間的結びつきには深いものがあり、思想的にも共鳴するものがあったが、「日本的キリスト教」に関しては、その内容は明らかに両者は異なっていたと言わなければならない。

海老名は、「日本精神に同化したキリスト教」や普遍的キリスト教を特殊

(7) 渡瀬常吉『日本神學の提唱』ほぎな社、1934年

(8) 渡瀬常吉『海老名弾正先生』龍吟社、1938年、348-358ページ。

(9) 武田清子「海老名弾正評伝」（海老名弾正『新人の創造』教文館、1960年、所収）141ページ。

日本的キリスト教に変容する「日本的キリスト教」については、反対してこのように述べている。

儒教も日本化した、佛教も日本化した、それ故に基督教も日本化せねばならぬ、三教會同の如きも、畢竟するに基督教を日本化する方策に外ならぬなど論ずる人がある。儒教は日本化したかも知らぬ、佛教も日本化したかも知らぬ。然れども基督教はその本質を犠牲にして日本化するものではない。(略) 基督教の本質はギリシヤ化せられたるにもあらず、羅馬化せられたるにもあらず、獨逸化せられたるにもあらず、アングロサキソン化せられたるにもあらず、寧ろ是等の有らゆる民族を基督教化せんと努力し來つたのである。(略) 儒教が日本化したるが如く、又佛教が日本化したるが如く、若し基督教が日本化するならば、その時こそは基督教の破滅である。⁽¹⁰⁾

この言葉にも明かなように、海老名は基督教の本質を変容させる意味での、すなわち神道・儒教・仏教など日本の伝統思想の中に埋没させたり、習合するような意味の「日本的キリスト教」は提唱していない。

さらに、海老名の「日本的キリスト教」を考察する際に注目しなければならないのは、国粹主義、軍国主義、国家主義と共存できるという意味の「日本的キリスト教」が、盛んに唱えられた1930年代の海老名の言動である。この頃海老名は未だ元気で各地に講演活動を行っていた。その中には、「日本精神の本質と基督教」⁽¹¹⁾とか「新日本精神」⁽¹²⁾とか「新日本精神の真髓」⁽¹³⁾とかの講演がある。これらは、題名から見ると一見国家主義、軍国主義に妥協するような内容の講演がされているような印象を与えそうであるが、実際には、それらには渡瀬の『日本神學の提唱』に見られるような基督教と日本思

(10) 海老名彈正「吾人が本領の勝利」『新入』14巻12号、1913年12月1日、13、14ページ。

(11) 海老名彈正『新日本精神の本質と基督教』中央會堂教務部、1933年11月4日

(12) 海老名彈正『新日本精神』近江兄弟社出版部、1934年12月25日

(13) 海老名彈正「新日本精神の真髓」(田中左右吉編『昭和十年・組合教會講演集』日本組合基督教會本部所収75-88ページ)

想を直線的に結合させるような思想は展開されていないのである。

筆者は、海老名評価において最大の否定的評価の根拠となっている、海老名の「日本的キリスト教」を日本キリスト教史などですでに常識化されつつある「日本的キリスト教」から解放して、正当に評価することが何よりも必要であるとする。代表的なキリスト教思想家である内村・植村・小崎弘道（1856-1938）などとは異なる海老名のユニークさもこの「日本的キリスト教」にあるので、これが正当に理解されない限り、海老名研究は核心に迫らないと言っても過言ではない。

海老名は、1900年の『新人』の創刊号において「宗教の道具は之を海外に購ふべきも、宗教其れ自身は之を内國に発輝するの外なし。吾人が當初より日本的基督教を主張するも是れが為なり⁽¹⁴⁾」と述べ、晩年の著書『日本國民と基督教』（1933年）においても、

兎角基督教を以て輸入物のやうに考ふるのであるが、日本人の心底深く體驗する所の基督教は輸入物ではない。禮拜式や教義や又聖書は輸入物に相違ない、けれども敬神の嚴肅なる感情、敬神の純良なる意志、又敬神の明なる直覺は日本國民の至誠より自發する者であつて、外部より附け加へ得らるべきものではない。(略)學説は外國より輸入することを得る、然れども智覺と感情と意志とは、我れそのものが自得すべきものであつて、外部から強制的に與へ得べきものではない、宗教そのものは自發的のものである、自得すべきものである、故に活ける宗教としての日本の基督教は、日本に發生したる生へぬきであつてつけやきばではない、我々は日本國民とこの生へぬきの基督教とを論ぜんと欲するのである。⁽¹⁵⁾

と述べて「日本的キリスト教」の成立の必要を説いている。

当然のことながら、従来の海老名研究でも、この「日本的キリスト教」に

(14) 「基督教の形骸」『新人』1巻1号、1900年7月10日、5ページ。(無署名だが『新人』10巻10号、39ページより海老名)

(15) 海老名隴正『日本國民と基督教』北文館、1933年、9、10ページ。

海老名思想の特質があることを指摘するものはあるが、そこに焦点を合わせて彼の思想の全体から考察したものは未だない。

筆者が、従来の海老名研究を見て一番欠如していると思うのは、海老名の「日本的キリスト教」において大きな位置を占めている神道についての考察がこれまでの研究では非常に少ないし、あっても表面的である点である。日本理解や伝統思想とのかかわりで内村・植村・小崎と武士道・儒教で共通しながら、海老名が三者と最も異なっていたのは、その神道理解や共鳴の深さにある。しかも注目すべきなのは、その神道理解や共鳴が国家神道だけでなく黒住教や禊教に及んでいることである。ところがこれまでの海老名研究では、神道との関連には説き及んでも、黒住宗忠（1780-1850）や井上正鐵（1790-1849）の思想との関連で説いているものは皆無である。海老名を国家至上主義と結びつけようとする者が、彼の国家神道への共鳴を根拠にしたりしているのだが、では、神道への関心の初期から晩年まで一貫して共鳴していた黒住宗忠との結びつきはどのように説明するのであろうか。

さらに、海老名の「日本的キリスト教」の成立の契機や時期については、日本人キリスト者が西洋人教師や宣教師から独立して思想を展開するようになった1890年前後から考える必要がある。⁽¹⁶⁾ 1890年、横井時雄（1857-1927）は『六合雑誌』に「日本將來の基督教」を掲載し、その中で「日本風の神學を組織し、日本風の禮拜儀式を創始せんことを希望するものなり」⁽¹⁷⁾と述べている。この意見は普及福音教会の宣教師などにも支持され、機関誌『真理』は「吾人は日本の基督教が果して日本の基督教たるの日を待て之れを歓迎せんと欲するものなり」⁽¹⁸⁾と賛意を表した。海老名の「日本的キリスト教」は、この流れの中に位置づけるべきものであるし、それは日本キリスト教史で常識

(16) 魚木忠一は「神學的覺醒は明治二十一、二年を中心とする前後の数年に起り、この時に初めて、日本の基督教特に指導者は神學を學的問題として反省した」としている。魚木忠一「宮川経輝先生と日本基督教神学」『基督教研究』21巻1号、3ページ。

(17) 横井時雄「日本將來の基督教」『六合雑誌』114号、1890年6月17日、3ページ。

(18) 鐵硯生「日本の基督教」『真理』11号、1890年8月10日、6ページ。

的にされている、1930年代の国粹主義、軍国主義と妥協してキリスト教を存続させるために唱えられた「日本的キリスト教」と一直線に連続していくようなものではない。

このような視点から、海老名の「日本的キリスト教」は再構築する必要がある。

2 思想の変遷

つぎに、これまでの海老名研究で誤解を生じさせ、ひいては否定的評価にも導いているものは、海老名が一貫した思想を持っていない、時代によって思想を変化させたというものである。

例えば、歴史家、山路愛山（1865-1917）による植村と海老名に関する有名な人物月旦での次の言葉である。

何と言ひても日本耶蘇教會の大立者は植村正久君と、海老名彈正君なり。

（略）植村君が正統教會の驍將たると相對して自由基督教の総大將と目すべきは海老名彈正君なり。（略）植村君は番町教會に據り、海老名君は本郷教會に據る。番町教會は紳士の教會にして本郷教會は書生の教會なり。本郷教會の如き書生の中心に立ちて、海老名君の如く動き易く感じ易く、他人より益を受け易き心が時代の潮流に感じ、新思想の鼓吹者となりしは敢て怪むに足らず。（略）君は最も多く周圍に感化せらる。君は小崎君と遊べば小崎君に感化せられ、横井君と遊べば横井君に感化せられ、善く他人の長所を取つて之を醇化す。君は其心に於て極めて謙遜なり。君の眼中には事理の研究に於ては總ての人は同等なり。君の心は流動せる蠟の如し。餘りに強く一定の説を固執せず。故に君は今日に於ても君の最も善しと感じたる方向に向つて常に其説を變化す。⁽¹⁹⁾

海老名が時代や他人の影響を受けやすく、次々に思想を変えた、という一つの根拠がこの山路愛山による海老名観からきている。これと類似の海老名

(19) 山路愛山「我が見たる耶蘇教會の諸先生」『太陽』16巻16号、1910年、43、45ページ。

観は、柏木義円（1860-1938）にもある。彼は海老名から洗礼を受け、実の姉が海老名家で世話になっており、個人的には海老名は師であり恩人でもあったが、思想上は根本的に相違していた。柏木は自らが主催する『上毛教界月報』で海老名を批判して次のように言っている。

先生は往年大に神道を研究し世は先生を目するに神道的基督教、日本の基督教を以てした。併し今は先生は頗る世界的である。

先生は又嘗て戦争美を説かれた併し今は平和主義者である（どれ程徹底した平和主義者か不分明なれど）

先生は如何なる時代に神道的基督教で將た如何なる時代から世界的になられたか又如何なる時に戦争美を説き將た如何なる時に平和主義を高唱されたか之を研究したらば先生を識るに於て蓋し餘師があるかも知れぬ。⁽²⁰⁾

終戦後、内村の非戦論とともに柏木の非戦論、さらに彼が所属していた組合教会による日本人との同化を推進する朝鮮伝道に反対していたことなどが注目されるようになった。その結果、『柏木義円集』が出版され、『上毛教界月報』が復刻されることにより、彼の視点からのこの海老名観が一部の研究者に定着することになった。

また、海老名と同じ組合教会の牧師であった後輩の湯浅与三（1902-1977）は、海老名には宗教体験に根ざした一貫した理論がなかったのではないが、と断りつつも

青年時代のことはさて置き日清、日露の戦役の頃に日本的基督教を鼓吹した。また歐洲大戰後國際聯盟の華やかなりし時代には世界的基督教を説いた。然るに晩年に至り満洲事變以後再び日本的基督教を高唱した。

これは餘りにも時代を見るに敏なる實際家であった⁽²¹⁾

ためである、としている。その他にも、同志社はその使命を終えたので解散

(20) 柏木義円「海老名先生と私」『上毛教界月報』391号、1931年6月20日、8ページ。

(21) 湯浅与三『我國に於ける三大基督教思想家』警醒社、1942年、49ページ。

すべきであると痛烈に批判した⁽²²⁾が、後に乞われて総長に就任したため、その変化が問題にされたこともあった。

はたして、海老名における思想の変遷の実態はどのようなものであったのか。筆者は、海老名に思想の変化があったことは認めるが、これまでの海老名論にあるように、時代思潮に迎合して、そのたびに思想が変化したとは思わない。従来ともすると、同時代の著名なキリスト教思想家である、内村や植村が正統主義、福音的キリスト教思想に一貫して立脚していたのに比べて海老名の変化があたかも節操がなかったり、確固とした思想が欠如していたかのように説かれることがある。しかし内村・植村と海老名との比較で忘れてならないことは、内村が1900年に『聖書之研究』を創刊して、この雑誌の発行を中心にするようになってから殆ど社会的発言、時評論を公にはしていないことである。家永三郎氏が、「日本思想史上の内村鑑三」⁽²³⁾で、これ以降の内村の社会意識はいちじるしく後退し、社会思想史上は評価できないとしている。植村も1890年に『日本評論』を創刊し、時評や文芸論など盛んに論じたが、5年後に第64号で廃刊した。その後は『福音週報』（後に『福音新報』）によるキリスト教徒を対象にした言論や教会活動にその言動を限定した。植村をよく知る山谷省吾（1889-1982）は「明治三十年代から先生は教会と伝道界にとじこもり、『福音新報』を出し神学社を経営し、キリスト教内の活動に専心したため、六合雑誌時代に見られた文芸、社会論評はもう見られなくなりました。私はこの点物足りなく思います」としている。⁽²⁴⁾

それに対して海老名は、『新人』誌上において、社説で常に政治、社会、教育問題に発言し続けた。そして当然のことながら、時事問題に発言するか

(22) 母校同志社が紛争に揺れている時に、『新人』誌上に「同志社は果して存在の価値ありや」（6巻7号）と題する文章を掲げ、同志社は新島の死と共に日本での使命を終えたので、解散し、朝鮮か満州に移転して新使命のもとに存続すべきであると述べた。しかし、15年後に同志社総長に就任したので、一部の人々から就任に反対されたり、変化の理由を執ように求められたりした。

(23) 家永三郎「日本思想史上の内村鑑三」鈴木俊郎編『回想の内村鑑三』岩波書店、1962年、114-120ページ。

(24) 久山康編『近代日本とキリスト教—明治篇—』基督教学徒兄弟団、1975年、110ページ。

ぎりその時代に最も問題になっている事柄について発言し、戦争時には戦争について、平和時には平和について発言する。要はその内容、思想であって、それが右から左へ変わるように思想が変化しているのかということである。この点についての考察は、従来の研究では不十分である。

筆者は、海老名の思想の変遷を考察する上で彼が弟子に宛てた次の書簡が大切であると考えている。

小生は思想界の第三期に入らんとして居る。第一期は申迄もなく Orthodox 第二期は New theology 第三期はそれ果して如何、小生も幸に此第三期に入るを得ば、更に十五年乃至二十年を要すべく候。⁽²⁵⁾

海老名の思想の変遷については、特定の時期や表面上のことではなく、生涯全体から時代を追って彼自身のこの言葉も踏まえて考察されるべきである。それにより、何が変わり何が一貫していたのかが明らかになるであろう。

3 資料について

加藤常昭氏はその著『日本の説教者たち』の中で海老名をとりあげ、59ページにわたって論じている。その中で「パウロ、アウグスチヌス、ルター」の流れと「ヨハネ、オリゲネス、シュライエルマッハー」という二つの流れに言及した「注」のところで「海老名自身は、どちらかと言えばこの後者の系列に立っていることは明らかである。彼が若い時から最も愛したのはヨハネ福音書である⁽²⁶⁾」としている。

確かに『新人』をみる限りは加藤氏のいう通りであるが、海老名の生涯全体から考察すると果たしてそうだろうかという疑問が生じる。特に、海老名が「若い時から最も愛したのはヨハネ福音書」であると断定している点である。というのは、海老名の処女作が『彼得前後書註釋』⁽²⁷⁾でヨハネでなくペテ

(25) 千葉豊治「書翰の一節」『同志社新報』16号、1937年8月15日、4ページ。

(26) 加藤常昭『日本の説教者たち』新教出版社、1972年、237ページ。

(27) 海老名彌正『彼得前後書註釋』江藤書店、1887年

ロであることとの関連は一体どうなるのかという疑問である。

現時点では、明白に加藤氏の誤謬と断言できるものの、これに関する海老名自身の資料に出会うまでは頭を悩ませる問題であった。なぜなら、これまでの海老名研究でこの処女作に言及したものは皆無に近いことと、この書物には明確に海老名の名前が記されているものの、本文中には海老名と特定できる個人的なことが一切記されておらず、また後年の海老名の文章や思想の特徴が見られず、さらに奥付には「福岡県士族」とこの時代のキリスト者の著書には珍しい肩書があったりして、『彼得前後書註釋』そのものがはたして海老名本人による著書かどうかということで考慮の余地があるように思えたからである。当然のことながら、海老名の名前による誰か第三者の著書との疑いも持ったが、執筆時30才の海老名は彼の名前を借りて著書が出版されるほどの有名人物ではないので、加藤氏の言葉との矛盾で悩んだのである。

この問題を一举に解決してくれたのは、雑誌『基督教講壇』の海老名の講演筆記であった。

私がクリスチヤンと成つて以來、三十二歳の頃迄はペテロが好きで、聖書中にある人物で一番彼れを懐かしく想つた。(略)初めて筆を持つて何か書こうと決心した時に、ペテロ書の註釋を書いた位である。然るに後又少しく聖書中にある人物の見方が變つて、私はポーロが慕はしくなつて來たのである。初めは何と無く彼に懐き兼ねて居たが、自分の歳の行くと共に、信仰の經歷の進むに連れて、ポーロが慕はしく又彼れを尊敬する様になつた。以來今に至るまでポーロ崇拜者であるが、今後神が十年二十年の歳月を恵んで下さるならば、ヨハネを慕ふ様になるであらう、
(28)
近來少しく其の傾向が表はれて來た。

これを見れば、『彼得前後書註釋』が海老名の書物であることは明らかであり、加藤氏の海老名が若い時からヨハネを愛好したというのは誤りであるばかりでなく、海老名を二つの流れのうちの「ヨハネ、オリゲネス、シュラ

(28) 『基督教講壇』10号、1905年10月、1、2ページ。

イエルマッハー」の流れと簡単に位置付けることも正確でないことが判明する。ペテロ、パウロを経て、ヨハネやオリゲネスに至っているその経過や思想の進展が大切であることがわかる。

実は、これも一例であって、これまでの海老名研究においては、明確な資料に基づかないまま断定している例があまりにも多いのである。しかも、その誤りであることを指摘するにも、資料が乏しかったというのが実情である。

湯浅与三が「海老名氏の全集はまだ刊行せられて居ない。しかし既刊のものと遺稿それに其他新聞雑誌に發表されたものを加へるならば優に植村全集(29)や小崎全集に比すべき全集が出来る筈である」と述べたのは1942年であるが、それから半世紀を経た現在も海老名全集は出ていない。海老名研究の最大の障害は、この海老名の著作集・全集が一度も出されていないということに尽きると言える。

海老名関係の貴重な資料は、海老名の長女道子が継承し、亡くなった後は石川文化事業財団「お茶の水図書館」に引き継がれ、現在未整理のまま保管されている。これとほぼ同じものが道子生前中にマイクロ化され同志社大学人文科学研究所にある。さらに同人文研には海老名の英文関係の資料が「湯浅与三関係資料」の中に保管されている。これらは手書きの貴重な資料をふくんでいるのであるが、完全なものではない。さらに、そのような貴重な資料もさることながら、何よりも海老名の活字化された著書・論文を総て揃えている大学・研究機関がないことである。海老名と縁の深い同志社にも総ての資料は揃っていない。

このような事情によるのであろうが、これまでの海老名研究を考察して見ると殆どが入手、閲覧が容易な資料に限定されており、しかも資料の入手しやすい海老名を否定的に評価した人々の言葉を先入観として、論じられていることが大半であることがわかる。

このような海老名研究の状況を打破して、さらに進展させるためには、同

(29) 湯浅與三、前掲書、36ページ。

よりも資料の収集が大切であることは言うまでもない。そのような反省と認識に立脚して、筆者がこの数年間に収集した海老名関係の資料は、活字にされたものに限っても、著書・編著は49、論文（随筆など）は1,407点、掲載雑誌・新聞は30数種類に及んでおり、しかもこれは今後収集が進むにしたがいさらに増える見込みである。

この資料収集の過程で明らかになったことの幾つかを記しておきたい。

第一は、著書・編著49冊の内22冊は、『新人』掲載の論文を中心にしていること。22冊は、数字上は全著書の半分に満たないが、内容上からあるいはページ数からも、代表的な著作は『新人』から生まれていると言える。その意味でも最近『新人』の復刻版が出されたことの意味は大きい。少し意外なことは、『新女界』（これも復刻版はすでにある）にもほとんど毎号執筆しているものの、その原稿をまとめて一冊にしたものが見当たらないことである。

また、『新人』の論文がそのまま、あるいは少し加筆・修正されたりして著書にまとめられているのであるが、この著書を利用する際に注意すべきことは、一冊の著書でもかなりの年数にわたる号の『新人』から選択されていることである。例えば『新國民の修養』の場合、一番早いものは1903年1月1日で、遅いものは1910年6月1日で、7年5カ月の期間にわたるものが収録されている。しかも収録された論文の出典や執筆された時期は記されていない。これは一番長い期間の例であるが、『新人』の論文を中心に『著書』になっている22冊をチェックしてみても大半は2、3年にわたっている。海老名研究にあたっては、どの著書が『新人』のどの論文に基づくか明白にした上で、資料として使用すべきであろう。

第二には、講演や説教の筆記が多いことである。若い時から雄弁で知られ、講演で人々を引き付けた海老名の姿がここにも反映している。ただ、ここでも注意すべきことは、「未校閲」「文責在記者」が著書にもあるし、講演筆記にいたっては88点もあることである。このことは、海老名の生涯と思想を考察する際に重要で決定的な言葉を「未校閲」「文責在記者」のものから単純

に引用することは戒めなければならないことを意味している。

第三に、『新人』の891点に次いで、第三位の『新女界』の136点よりも多い169点を掲載している『基督教世界』についてである。この週刊誌が限られた所でしか閲覧できないということもあってか、これまでの研究にはあまりこの資料が用いられていないことである。今後の研究においてはこの資料も活用されるべきである。

第四に、筆名については、大部分が「海老名弾正」であるが、その他に「海老名喜三郎」「温山」「良峯」「紫海」「紫溟」がある。なかでも、『新人』の時評欄に「温山」「良峯」名で37点執筆していることは重要である。特に、これが時評欄であるので、時代・社会に対する海老名の思想を考察する上で大切であると思われるのに、海老名と時代・社会とのかかわりを論じたこれまでの研究に「温山」「良峯」名で書かれた資料を引用したり言及したものがないのは残念である。

筆者は、現在行っている資料収集をさらに進めて、その資料に基づき従来の海老名論にとらわれない新しい海老名論を展開したいと考えている。

おわりに

海老名の弟子や影響を受けた人物は多い。キリスト教界はもとより、海老名が本郷教会牧師であった時代に東京帝国大学の学生として海老名に接して影響を受け、卒業後それぞれの分野で活躍した人々も数多くある。

海老名の門下生の中で今日最も著名なのは、民本主義で有名な吉野作造(1878-1933)であろう。吉野は海老名と出会う以前にすでに洗礼を受けキリスト者になっていたが、東大学生時代に海老名の説教に感銘を受け、本郷教会の会員となり、海老名が創刊し主筆であった月刊誌『新人』に海老名の講演筆記を掲載したり論文を執筆したりした。卒業後も両者の親密な関係は続き、死ぬまでその関係は保たれた。海老名と吉野の両者を師と仰ぐ今中次磨(1893-1980)は、海老名の吉野への影響について次のように述べている。

吉野作造先生の政治評論を裏附けた基本觀念は全く海老名先生の近代主義であり、そのヒューマンズムであつた。あの困難な國家主義の時代に、民本主義をかかげて、街頭に戦われた吉野先生の力は、海老名先生の精神に立つものに外ならなかつた。⁽³⁰⁾

また、吉野作造研究者の三谷太一郎氏は「思想家としての吉野作造」の中で次のように記している。

海老名の歴史主義的聖書解釈の方法はそのまま吉野の学問の方法として移植された。いいかえれば海老名の神学が天から地に投影されて吉野の政治学および歴史学となった。そしてその際海老名の神学の哲学的基礎である歴史主義が吉野の政治学および歴史学の哲学的基礎となった。すなわち吉野を思想家たらしめた条件は海老名神学から吉野自身によって引き出されたのである。⁽³¹⁾

この海老名と吉野との深い結びつき⁽³²⁾の指摘を見てもわかるように、海老名研究には、右に渡瀬常吉や国粹主義・軍国主義・国家至上主義に妥協したりそれを支援する形の「日本のキリスト教」の思想的源泉とされる海老名論があり、左には吉野の民本主義・ヒューマンズムの思想的源泉とされる海老名論がある。

このような両極端の海老名論があるということは、ある意味では海老名の思想のスケールの大きさを示すものであり、彼の全体像を明らかにすることの容易でないことを示唆するものであろう。

今中次磨が、「神學や聖書や一般思想だけでは、先生を正しく抽出するこ

(30) 今中次磨「海老名弾正先生」『開拓者』479号、1949年11月、44ページ。

(31) 三谷太一郎「思想家としての吉野作造」『吉野作造』中央公論社、1972年、21ページ。

(32) 吉野は師の海老名より先に亡くなったこともあり、海老名について体系的に記したものはないが、海老名の影響について次のように述べている。「私の思索生活に最も大きい影響を与えた具体的事実はないかと反省してみると、大学生時代に聴いた海老名弾正先生の説教が夫れであると思ふ。日曜毎の説教に依て私は信仰上に得る所も少なくなかったが、先生が宗教上の神秘的な問題を、科学的に殊に歴史的に、快刀乱麻をたつの概を以て釈いて行くのには、教へらるる所非常に多かった。斯うした先生の態度に依て私の学問上の物事の考へ方が著しい影響を受けて居ることは、今以て先生に感謝して居る。」（吉野作造「古川余話」非売品、1933年、31ページ。）

とができない。先生の持つていられたものの中には、ヘーゲルのような総合的な文化思想と更にそれと切離せない宗教信仰とがあつた。同じような総合的教養のあるものでなければ、先生の傳記は正しく書けないと思われ⁽³³⁾る」と述べているが、この言葉は決して誇張したものではないというのが筆者の実感である。筆者は、今中の言う「同じような総合的教養のあるもの」と自負する者ではないが、今後の海老名研究で海老名の実像・全体像を少しでも明らかに出来たらと考えている。

(1992. 9. 30)

(33) 今中次鷹，前掲書，45ページ。